

英語の多重談話関連要素移動について

田中 公介*

産業医科大学 医学部 英語

要 旨：統語計算ならびに意味解釈の必須要素である文タイプ・発話効力関連句(force phrase: ForceP)と定性関連句(finite phrase: FinP)の二種類の機能投射が、生起が随意的な話題化関連句(topic phrase: TopP)と焦点化関連句(focus phrase: FocP)の二種類の談話関連投射を挟み込む形で節境界位置に現れると想定されるカートグラフィ補文標識句(complementizer phrase: CP)分析について、前者二種を、近年のミニマリスト統語派生理論における統語計算の基本単位であるフェイズと想定することは理論的に妥当である。本論では、このような統語派生分析をフェイズカートグラフィCP分析と称し、その分析のもとで、英語の節境界位置に複数の談話関連要素が出現する多重談話関連要素移動(multiple discourse-related movement: MDM)について考察する。具体的な移動要素は、話題化要素、焦点化要素、そしてWh疑問文におけるWh疑問詞である。本分析は、節境界位置に移動した談話関連要素の語順に関する文法的事実を捉えることができる。

キーワード：フェイズ, カートグラフィCP, 話題化, 焦点化, Wh移動。

(2018年2月7日 受付, 2018年8月16日 受理)

はじめに

フェイズカートグラフィComplementizer Phrase(CP)分析

近年のミニマリスト統語理論において想定されている統語派生上の計算単位であるフェイズは、主に補文標識句(complementizer phrase: CP)と軽動詞句('little' verb phrase: v*P)の二種類である[1]。これらの要素は解釈上の命題を構成する単位であると共に、移動(movement)や一致(agreement)、インターフェイスへの転送(transfer)のような統語派生の中心を担う要素として想定されている[1]。この考えの枠組みで、(1a)の平叙文の統語派生を(1b, c)に示す。(1b)におけるv*Pの派生段階では、その主要部(v*)の補部である動詞句(verb phrase: VP)が音韻解釈と意味解釈双方のインターフェイスに転送される。次に(1c)のように、CPの主要部要素(C)から、時制句(tense phrase: TP)の主要部要素(T)に一致素性(agreement feature: AF)が継承され、主語

とT間の一致(A-agreement)と主語のTP指定部への移動が駆動される。その後、Cの補部であるTP全体が転送される。*1

(1) a. He loves Mary.

b. $[_{CP} C_{[AF]} [_{TP} T_{[AF]} [_{v^*P} he\ v^*] [_{VP} loves\ Mary]]]]$



(Transfer of VP and Feature Inheritance)

c. $[_{CP} C_{[AF]} [_{TP} he\ T_{[AF]} [_{v^*P} he\ v^*] [_{VP} loves\ Mary]]]]$



(Agreement, Movement and Transfer of TP)

ここで、一致の形態的具現化パターンが豊かな英語以外の言語を見てみると、Cが主体となる一致現象は、C-T間のA-agreement以外にも確認される。例えば(2)のアイランド語の補文標識の一致に関する言語事実である。

*対応著者：田中 公介, 産業医科大学 医学部 英語, 〒 807-8555 北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1, Tel: 093-603-1611(内線4296), Fax: 093-693-3360, E-mail: tanaka-h@med.uoeh-u.ac.jp

(2) *Complementizer A'-agreement in Irish* [2]

- a. Creideann Seán *gur* cheannaigh Máire an carr.
believe John that bought Mary the car
'John believes that Mary bought the car.'
- b. Cad é *a* chreideann tú *a* cheannaigh Seán *?*
What believe you bought John
'What do you believe that John bought?'

(2a)の平叙節の補文標識と(2b)の疑問節の補文標識の形態は異なる。これは(2b)の場合は、節境界位置(すなわち、一般的な節構造におけるCP指定部位置)に移動したオペレータ要素であるWh句とCとの間で独自の一致(A'-agreement)が生じたことによるものと分析される。

以上の分析を一旦まとめると、フェイズであるCPの主要部は、(1b)に示すCからTへの素性継承操作を介して適用される主語のA-agreementと、(2b)に示すC自体とオペレータ要素間のA'-agreementの二種類の一致を司ると結論付けられる。これらの一致を分析する可能性として、本論ではCP中に二種類のフェイズ相当の機能投射が具現化され、これらの投射がそれぞれの一致を司ると想定する。具体的には、(3)に示す、英語の節境界現象に対して仮定されたカートグラフィCP分析を援用する[3, 4].^{*2}

(3) [_{ForceP} Force [_{TopP} Top [_{FocP} Foc [_{FinP} Fin [_{TP} T [...]]]]]]]

話題化関連句(topic phrase: TopP)と焦点化関連句(focus phrase: FocP)は、何れも談話関連要素が節境界位置に生起する場合にのみ生起する随意的な投射である。これらの指定部位置に移動した談話関連要素は当該の主要部とAFを介して一致を行い、その後の意味解釈インターフェイスで然るべき談話解釈を受ける。一方、文タイプ・発話効力関連句(force phrase: ForceP)と定性関連句(finite phrase: FinP)の二種類の機能投射は、派生中の必須要素として統語派生の中心的な役割を担う。本論ではこれらの機能投射がフェイズを形成し、それぞれ関連するAFを介して移動と一致が引き起こされると考えてみる。特に一致については、ForcePがA'-agreement, FinPがA-agreementを担うと仮定する。

これら二種類の機能投射の機能について概観する。ForcePはCP構造の最上位の投射として節の種類(例、平叙節、疑問節など)を決定する[5]。また、(4)の各事例に示すように、必要に応じてCP中の関連領域へのオペレータ要素(例、Wh疑問文におけるWh句、話題化構

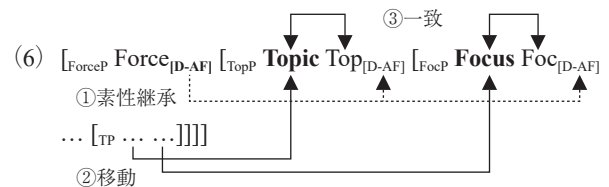
文における話題化要素など)の移動を駆動する。

- (4) a. **Who** _ loves Mary?
b. **This book**, I really like _ . [6]
c. **Under no circumstances** will the university change its ruling _ . [7]

これらの要素の移動ならびに一致を駆動するために想定された素性が、[Wh]素性や[Focus]素性のようなA'素性であるが、本論ではこれらを総称的に談話関連の一致素性(discourse-related AF: D-AF)と呼ぶ。上記で見た、フェイズが統語派生の中心的な要素であるという仮定のもとでは、ForcePの主要部要素(Force)は固有にD-AFを担い、その素性がオペレータ要素のForceP指定部への移動と一致を駆動すると考えられる。オペレータ要素の基底位置をTP内と想定した場合、(5)に示すように、Forceの担うD-AFによってその指定部位置までの移動が駆動される。その後、オペレータ要素とForceとの間で一致がなされる。

(5) [_{C(Force)P} **Operator** Force_[D-AF] ... [_{TP} ...]]

ここで、移動と一致に関するForceの機能を、(1b)の素性継承操作ならびに(3)のカートグラフィCP分析の観点から捉え直してみると、Forceは、その下位にある二種類の機能投射であるTopPの主要部要素(Top)およびFocPの主要部要素(Foc)に対して、D-AFを継承する可能性が考えられる。これをもとにした派生が(6)である。

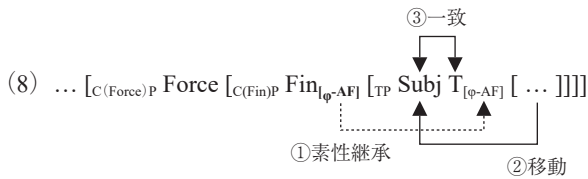


ForceがTopならびにFocに対してD-AFを継承させることによって、話題化要素と焦点化要素はそれぞれの指定部位置へ移動し、D-AFを介して主要部と一致する。

次にFinPの機能について概観する。この機能投射は節の定形性(finiteness)を担う要素として、その関連要素(例、主語、補文標識that、不定詞toなど)の具現化を担う。ここでは、(7)に示す従属節の主語の格形態について考察してみる。

- (7) a. Mary believes [that he/*him is late].
- b. Mary believes [him/*he to be late].

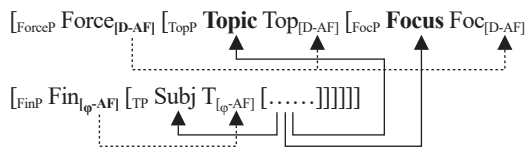
(7a)の従属節は補文標識“that”によって導入される定形節であり、主語の格形態は主格である。一方、(7b)は不定詞のtoが現れる非定形節であり、主語の格形態は目的格である。主語の格形態が従属節の定形性に伴って変化する(7)の事実は、定形性を司るFinPの主要部要素(Fin)と、主語の一致に関与するTとの間の関係に基づく、TP指定部位置の主語とTとの一致の有無によるものであると考えられる。このFin-T関係がフェイズ理論における素性継承操作に相当すると見なすと、FinはTに対して、主語の一致を司る素性の集合であるφ一致素性(φ-AF)を有し、それをTに継承させる(8)のような派生を考えることができる。



(7a)の定形の従属節では、(8)のようなφ-AF継承操作が適用された結果、主語のTP指定部への移動とTとの間での一致が行われ、その格形態は主格となる。このFin-T間のφ-AF継承操作は、(1b)で示したC-T間のAF継承操作に相当すると考えられる[1]。一方、(7b)の非定形の従属節では、フェイズであるFinPが投射しないと想定すると、(8)のような従属節内でのφ-AF継承操作が適用されない。よって、主節のv*と従属節のTとの間でφ-AF継承操作が適用され、その格形態は目的格となる。

以上のForce-Top/Foc間のD-AF継承を介するA'-agreementと、Fin-T間のφ-AF継承を介するA-agreementを図式化したものが(9)である。それぞれのAF継承操作が適用された結果、談話関連要素ならびに主語の移動と、移動先の主要部要素との一致が生じることになる。

(9) Phase-based Cartographic CP System



なお、(9)のような複数の機能投射に分化されたCP構造は、基本的には談話要素などが当該領域に出現しうる場合のみに想定されているが[3]、本論では説明の便

宜上、どの場合においてもカートグラフィ構造を用いることにする。

多重談話関連要素移動の派生分析：主節編

本論で(9)として提案したフェイズカートグラフィCP分析のもとでは、談話要素が複数節境界に出現する、多重談話関連要素移動(multiple discourse-related movement: MDM)の語順についての文法性を適切に説明することが可能となる。まずは、(10)のように、定形節の文頭位置に話題化要素が複数現れると容認性が低下する事例について考察する。

- (10) a. ??[That book]_i, [to John]_j, Mary handed _i _j. [8]
- b. ??[To John]_j, [that book]_i, Mary handed _i _j. [8]

これらについて、(9)の派生分析の枠組みでは、(11)に示されるように、フェイズであるForceがTop/Focに素性継承するが、英語においてはTopPが一つしか想定されないため[9]、何れかの話題化要素がその指定部位置に移動できず、(10)の出力を作り出せない。

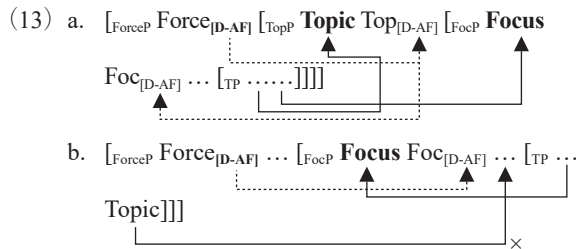


仮に双方の話題化要素をTopP内に移動させて(10)のような語順を作ったとしても、Topに継承されたD-AFは一つであり、何れかの要素は一致ができない。よって、その後の意味解釈インターフェイスで適切な解釈を得られず、非文になってしまう。

次に、文頭位置に現れる要素として、話題化要素と焦点化要素の組み合わせを考察する。(12)の事例で示されるように、これらの談話関連要素が共起する場合、話題化要素は焦点化要素に先行できるが、焦点化要素が話題化要素に先行できないことが知られている。^{*3}

- (12) a. [This book]_i, [to ROBIN]_j, I gave _i _j. [10]
- b. *[To ROBIN]_j, [this book]_i, I gave _i _j. [10]

(12)の対比についても、(9)の分析は適切な説明を与えることが可能である。(9)の構造では、TopPがFocPの上位にある階層構造が形成されている。よって、必然的に話題化要素が焦点化要素に先行する(12a)の出力は作り出せるが、この逆である(12b)の出力は作り出せない。(12)それぞれの派生を(13)に示す。

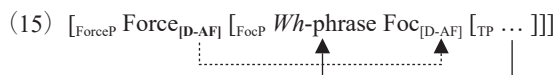


(13a)の派生では、何れの前置要素も適切な談話解釈を受けることができるが、(13b)の派生では、FocPの下位に、然るべき談話解釈が与えられるTopPが位置しておらず、この位置に移動しても意図される話題解釈を得られない。よって、本論の枠組みでは、話題化要素が適切な談話解釈を受けられないことが(12b)の非文法性の原因である。つまり、(9)で想定されるカートグラフィCP構造によって形成されるTopPがFocPの上位にある階層構造が、(12)の各例の対比を生むものと結論付けられる。

次に焦点化要素と、Wh疑問文において文頭位置に出現するWh疑問詞とが共起する事例について考察する。(14)に示すように、この場合は、焦点化要素がWh句に先行する語順も、その逆の語順も容認されない。

- (14) a. **[On no account]_i [which book]_j should I buy _{-i -j}.* [11]
 b. **[Which book]_i [on no account]_j should I buy _{-i -j}.* [11]

(14)では、文頭位置を対象とした二種類の要素の移動が生じている。一つはWh疑問詞“which book”のWh移動である。カートグラフィCP分析では、主節におけるWh移動はFocP指定部をターゲットとすると分析されている[3, 4]。このような分析を本論の枠組みで捉えたとすると、(15)の派生図に示されるように、ForceからFocに対してD-AFが素性継承され、FocP内においてWh句の移動と一致が生じる。



(14)の事例で確認されるもう一つの移動現象は、否定辞(“no”)を内包する前置詞句(preposition phrase: PP)である“on no account”の前置である。この移動は否定倒置(negative inversion)と呼ばれ、以下の事例に示すように、Wh疑問文の事例と同様に、助動詞の倒置が生じなければならない。^{*4}

- (16) a. **In no case** would I do that ₋. [12]

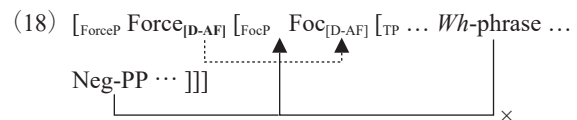
- b. **In no case* I would do that ₋. [12]

このことから、カートグラフィCP分析の枠組みでは、当該のPPは、Wh疑問文のWh疑問詞と同様に、FocP指定部位置に移動すると分析されている[3, 13]。^{*5}この派生を本論の枠組みで示したものが(17)である。



(15)のWh句の派生と同様に、この場合もForceからFocにD-AF継承がなされ、FocP内で否定辞PP(negative-PP: Neg-PP)のFocP指定部への移動ならびに一致が行われる。

以上の議論をまとめると、(14)の非文法性は二種類の前置要素(すなわち、Neg-PPとWh句)が唯一のFocP指定部位置を占めようとすることによって生じると説明される。カートグラフィCP分析では、FocPは一つしか投射しないと仮定されているので、(18)に示されるように、前置要素の何れかがその指定部位置に移動できず、結果として然るべき談話解釈を得ることができない。



つまり(9)の枠組みでは、(14)の非文法性は、(10)に示した多重話題化の事例と同様に、複数の談話要素が単一のFocP指定部位置を占めることができないという派生構造上の観点から説明されることになる。

さて、(15)の派生で示されたように、Wh句はForceからFocに継承されたD-AFによってFocP指定部に移動する。ここで今一度(9)のフェイズカートグラフィCP構造を考えてみると、Wh移動が生じる場合においては、FocPの上位にあるTopP指定部位置に何も要素が移動していないので、この位置をターゲットとする話題化要素の移動が適用可能であると予測される。この予測の妥当性は(19)の例文の文法性から裏付けられる。

- (19) **[A book like this]_i [to whom]_j would you give _{-i -j}?** [14]

但し、(20)に示されるように、Wh句が話題化要素に先行する語順の場合は非文となる。

- (20) ***[To which students]_i [this book]_j** would you recommend _{-j -i}? [11]

先に示した(9)の構造では, TopPはFocPの上位に位置する. Wh句の移動先はFocP指定部なので, その下に話題化要素が移動するTopPは存在しない. よって, (20)のWh句に後続する名詞句は, 仮にこの位置に移動したとしてもインターフェイス上で話題解釈を受けることができない. つまり, (20)の非文法性の原因は, 先に見た(12b)の非文法性とまったく同等であると結論付けられる.*6

多重談話関連要素移動の派生分析: 従属節編

本節では, (9)のフェイズカートグラフィCP分析を, 定形の従属節の節境界位置をターゲットとしたMDMの事例に応用する. まず, 英語では以下に示すように, 従属節中で話題化, 焦点化, Wh移動が適用可能である.

- (21) a. I believe that **this book**, you should read ₋. [15]
 b. Lee said that **at no time** would she agree to visit Robin ₋. [16]
 c. I wonder **who** John saw ₋. [17]

(21a, b)において, 移動した談話関連要素は補文標識“that”に後続する. この補文標識は平叙節のタイプを具現化する要素としてForcePの主要部に位置すると仮定されることを踏まえると[18], (9)のフェイズカートグラフィCP分析では, (21a, b)の派生はそれぞれ(22a, b)のように示される.

- (22) a. ..._{[ForceP that-Force_[D-AF] [TopP this book Top_[D-AF] ...}
 _[TP you should read ₋]]
 b. ..._{[ForceP that-Force_[D-AF] [FocP at no time Foc_[D-AF] ...}
 _[TP she agree to visit ₋]]

D-AFがForceからTop/Focに継承された結果として, (22a)では話題化, (22b)では焦点化の移動が生じていることが分かる.

(21c)の間接Wh疑問文の派生については, (15)で示した主節Wh疑問文の派生と同様に, Wh句がFocP指定部位置に移動する可能性が考えられるが, 疑問の解釈を担う従属節を補部にする主節動詞の選択特性を満

たすために, 節境界の最上位位置であるForceP指定部位置に移動すると仮定する. その根拠としては, 従属節の節境界位置へのWh移動の適用性が, 主節動詞の種類によって決定される, 以下(23)と(24)の対比をあげることができる.

- (23) a. *I wonder you saw who. [19]
 b. I wonder **who** you saw ₋. [19]
 (24) a. Who believes Mary went where? [19]
 b. *Who believes **where** Mary went ₋? [19]

(23)に示すように, 主節動詞“wonder”が補部を取る従属節は, その節境界位置にWh移動が適用された疑問解釈を担うものでなければならない. 一方, (24)に示すように, 主節動詞“believe”の場合は, Wh移動が適用されない平叙解釈を担うものでなければならない.*7この対比を本論の枠組みで捉えると, (23)における従属節は, Forceとその指定部位置に移動したWh句との一致関係に基づいて導出される疑問節でなければならないが, (24)における従属節は, ForceP内での一致関係を必要としない平叙節でなければならないと分析される. 前者の派生を示したものが(25)である.

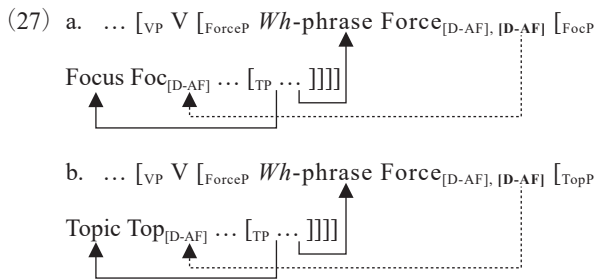
- (25) ..._{[VP V _{[ForceP Wh-phrase Force_[D-AF] ... [TP ...]]}}

Forceが持つD-AFによって, Wh句はその指定部位置に移動し, D-AFを介した一致を起こす.*8この結果, 転送後の意味解釈インターフェイスにおいて, 節の最上位のForcePが疑問節解釈であると判読され, そのForcePを補部を取る主節動詞“wonder”の選択特性が満たされることになる.

このような主節動詞の選択特性とカートグラフィCP分析を踏まえると, 間接Wh疑問文では, Wh句が話題化要素および焦点化要素に先行する語順であれば適格となる予測が得られる. この予測は(26)の例文の文法性から妥当である.

- (26) a. Lee wonders **why_j [in no way]_i**, would Robin volunteer _{-j -i}. [20]
 b. ?I wonder **[to whom]_j [this book]_i**, we should give _{-j -i}. [21]

節境界位置に Wh 句と焦点化要素が共起した(26a)も、同じ位置に Wh 句と話題化要素が共起した(26b)も、何れも容認性が高い。これらの従属節の節境界領域の派生を(27)にそれぞれ示す。

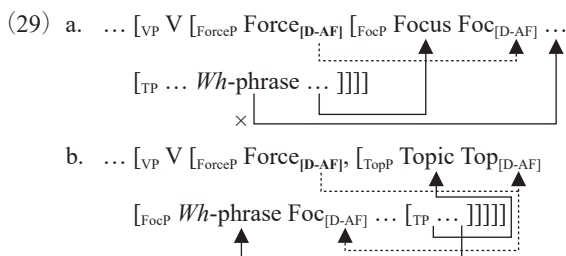


これらの派生で示される本論のフェイズカートグラフィ CP 分析の枠組みでは、Force 固有の D-AF による ForceP 指定部への Wh 移動と、Force から Foc/Top に継承された D-AF による焦点化ならびに話題化移動が同時に生じると考えることができ、結果として収束派生を導出できる。Wh 句の移動先は ForceP 指定部であり、Force との一致の結果、インターフェイス上で ForceP に疑問節解釈が付与され、主節動詞の選択特性を満たすことができる。

一方で、本論の枠組みでは Wh 句が談話関連要素に後続できないことを予測するが、この予測は(28)の各事例から正しいことが示される。

- (28) a. *Lee wonders [in no way]_i why_j would Robin
 volunteer _{-i -j}. [22]
 b. *I wonder [this book]_i [to whom]_j we should
 give _{-i -j}. [21]

これらの派生を(29)に示す。



まず(29a)の派生を見てみると、焦点化要素は Force から Foc に継承された D-AF によって ForceP 指定部へと移動可能だが、Wh 句はその下位に移動できる位置がない。仮に Wh 句が ForceP の下位の位置に移動したとしても、この位置では然るべき一致ができず、インター

フェイス上で疑問節の解釈も担えない。よって主節動詞の選択特性を満たすことができず、(28a)は非文であると判断される。一方(29b)では、話題化要素と Wh 句の何れも移動する位置があり(前者は TopP 指定部、後者は FocP 指定部)、(28b)の語順を作ることは、一応は可能となる。しかしながら、Wh 句の移動先は FocP 指定部であり、この位置も主節動詞から直接補部として選択される位置ではない。結果として、この場合も主節動詞の選択特性を満たすことができないので非文になると分析される。^{*9}

結 語

本論では、フェイズカートグラフィ CP 分析の観点から、英語の MDM 現象の文法性についての説明を行った。この分析では、ForceP-TopP-FocP という階層構造のもとで、フェイズ主要部の Force がその下位にある Top/Foc に対して D-AF を継承した結果、それらの指定部位置をターゲットとした、話題化・焦点化・Wh 移動のような談話関連移動が駆動される。また、従属節については、主節動詞が補部として取る節の選択特性を踏まえると、Wh 句の移動先が ForceP 指定部であると考えられる。以上の分析の結果、多様な MDM 現象における語順に関する文法的事実を説明することができた。

謝 辞

本論文は科学研究費助成事業(課題番号:15K02606)による援助を受けている。

注

- *1. AF は一致の対象となる要素をその指定部位置に移動させる拡大投射原理(extended projection principle: EPP) 的特性を担う。以降の本論の議論でも AF の EPP 特性が移動を促すものと想定する。
- *2. (3)の構造において、従来のカートグラフィ CP 分析のもとで想定される下位の TopP は、専らロマンス語系の節境界位置関連の文法事象を説明する機能投射であるという観点から想定しない[9]。
- *3. (12)において、焦点化要素で音韻的な強勢を受ける要素は大文字で表記する。
- *4. 倒置された助動詞要素は、T から Foc へと移動すると想定する。説明の便宜上、以降の議論ではこの派生は省略する。
- *5. (14) や (16) の事例において、前置された否定の PP

が焦点化要素であると考えられるのは、これがFocP指定部に移動してFocと一致することによるものであると説明される。

- *6. (19)と(20)の派生図は(13a, b)とまったく同等なので、ここでは割愛する。
- *7. 厳密には、節の意味解釈は統語派生完了後に転送されるインターフェイスで扱われるので、談話関連移動要素に対する談話解釈(例、「話題」や「焦点」など)と同様に、主節動詞の意味選択特性はインターフェイスで判読され、文法性が決定されると想定される。
- *8. ForceP指定部へのWh移動を促すD-AFは、従来の分析で想定された[Wh]素性に相当すると仮定する[23]。
- *9. さらに(28a, b)の事例は、主節Wh疑問文の派生とは異なり、間接Wh疑問文の派生では、Wh句はFocP指定部ではなくForceP指定部まで移動しなければならないことを示す事例であると考えられる。

利益相反

本論文内容について、利益相反に相当することはない。

引用文献

1. Chomsky N (2008): On phases. *In: Foundational issues in linguistic theory: essays in honor of Jean-Roger Vergnaud.* (Freidin R, Otero CP & Zubizarreta ML, ed). MIT Press, Massachusetts pp 133-166
2. Ó Baoill DP & Maki H (2012): On the highest subject restriction in modern Irish. *English Linguistics* 29: 357-368
3. Rizzi L (1997): The fine structure of the left periphery. *In: Elements of grammar: handbook in generative syntax.* (Haegeman L, ed). Kluwer Academic Publishers, Dordrecht pp 281-337
4. Rizzi L (2006): On the form of chains: criterial positions and ECP effects. *In: WH-movement: moving on.* (Cheng LL-S & Corver N, ed). MIT Press, Massachusetts pp 97-134
5. Rizzi L (1997): The fine structure of the left periphery. *In: Elements of grammar: handbook in generative syntax.* (Haegeman L, ed). Kluwer Academic Publishers, Dordrecht p 283
6. Chomsky N (1977): On *Wh*-movement. *In: Formal syntax.* (Culicover PW, Wasow T & Akmajian A, ed). Academic Press, New York p 91
7. Rochemont M (1978): A theory of stylistic rules in English. Routledge, London p 60
8. Saito M & Fukui N (1998): Order in phrase structure and movement. *Linguist Inq* 29: 439-474
9. Haegeman L (2004): Topicalization, CLLD and the left periphery. *In: Proceedings of the dislocated elements workshop, ZAS Berlin, November 2003 (ZAS papers in linguistics 35).* (Shaer B, Frey W & Maienborn C, ed). Zentrum für Allgemeine Sprachwissenschaft, Berlin p 168
10. Haegeman L (2012): Background: the articulated structure of the left periphery. *In: Adverbial clauses, main clause phenomena, and the composition of the left periphery: the cartography of syntactic structures, volume 8.* Oxford University Press, Oxford p 20
11. Haegeman L (2012): Background: the articulated structure of the left periphery. *In: Adverbial clauses, main clause phenomena, and the composition of the left periphery: the cartography of syntactic structures, volume 8.* Oxford University Press, Oxford p 29
12. Rizzi L (1996): Residual verb-second and the wh-criterion. *In: Parameters and functional heads: essays in comparative syntax.* (Belletti A & Rizzi L, ed). Oxford University Press, Oxford p 73
13. Haegeman L (2000): Negative preposing, negative inversion, and the split CP. *In: Negation and polarity: syntactic and semantic perspectives.* (Horn LR & Kato Y, ed). Oxford University Press, Oxford pp 21-61
14. Delahunty G (1983): But sentential subjects do exist. *Linguistic Analysis* 12: 379-398
15. Lasnik H & Saito M (1992): Topicalization. *In: Move α : conditions on its application and output.* MIT Press, Massachusetts p 76
16. Culicover PW (1991): Polarity, inversion, and focus in English. *In: Proceedings of the 8th Eastern States Conference on Linguistics.* (Westphal GF, Benjamin AO & Chae HR, ed). ESCOL Publications, Ohio State University, Columbus p 48
17. Chomsky N (1977): On *Wh*-movement. *In: Formal syntax.* (Culicover PW, Wasow T & Akmajian A, ed). Academic Press, New York p 97
18. Rizzi L (1997): The fine structure of the left periphery. *In: Elements of grammar: handbook in generative syntax.* (Haegeman L, ed). Kluwer Academic Publishers, Dordrecht p 312
19. Rizzi L (1996): Residual verb-second and the wh-cri-

- terion. *In*: Parameters and functional heads: essays in comparative syntax. (Belletti A & Rizzi L, *ed*). Oxford University Press, Oxford p 64
20. Culicover PW (1991): Polarity, inversion, and focus in English. *In*: Proceedings of the 8th Eastern States Conference on Linguistics. (Westphal GF, Benjamin AO & Chae HR, *ed*). ESCOL Publications, Ohio State University, Columbus p 53
21. Pesetsky D (1989): Language-particular processes and the earliness principle. MIT, Massachusetts p 13
22. Haegeman L (2000): Negative preposing, negative inversion, and the split CP. *In*: Negation and polarity: syntactic and semantic perspectives. (Horn LR & Kato Y, *ed*). Oxford University Press, Oxford p 28
23. Chomsky N (1995): The minimalist program. MIT Press, Massachusetts 420 pp
-

On English Multiple Discourse-Related Movement

Hiroyoshi TANAKA

Department of English, School of Medicine, University of Occupational and Environmental Health, Japan. Yahatanishi-ku, Kitakyushu 807-8555, Japan

Abstract : In light of the cartographic Complementizer Phrase (CP) analysis, in which two computationally requisite functional projections (i.e., Force Phrase: ForceP and Finite Phrase: FinP) sandwich two optional discourse-related projections (i.e., Topic Phrase: TopP and Focus Phrase: FocP) in the clause-peripheral domain, it is theoretically reasonable to postulate the former as phase, a basic computational unit assumed in recent minimalist syntactic theory. We call this hybrid-type of syntactic analysis Phase-based CP Cartographic Analysis. Using this, we investigate multiple discourse-related movement (MDM) phenomena in English, including Topicalization, Focalization and Wh-movement at the clausal periphery. Our approach can appropriately capture the grammaticality regarding word order, which is derived from the combination of these clause-peripheral movements.

Key words: phase, cartographic CP, topicalization, focalization, Wh-movement.

J UOEH 40(3): 243–251 (2018)